家族ガバナンス体制における「仕事」の意味と実践に関する考察

世界中のあらゆる精神的伝統において、共同体の一人ひとりが、自分自身が召されている意味ある仕事を見出し、それを全うすることの重要性が強調されている。この発見と全うのプロセスは、まず成人へと至り、ひいては幸福へと至る各個人の旅路において、極めて重要な要素であると認識されている[1]。働くことを学ぶとは、人間としての自らの尊厳を確立することを目的とした、規律を身につけるプロセスである。 その精神的伝統を構成する個人たちがこの旅路を無事に全うすることは、それぞれの集団において、繁栄するコミュニティの成長の基盤とも見なされている。仕事を通じた個人の発見と充実というこのプロセスは、繁栄する家族の成長にとっても同様に不可欠である。何しろ、家族もまたコミュニティの一形態であり、あらゆるコミュニティと同様に、その強さは構成する個々の要素の総和に他ならないからである。「三代続けばシャツの袖からシャツの袖へ」という普遍的な文化的な格言を乗り越えようとする家族は、長期的な家族の富の保全は、家族全員が「各家族の構成員の幸福を追求することを高めること」をその使命とするという決断にかかっている、という認識から始める。 家族の富とは、人的資本、知的資本、そして金融資本として定義される。こうした家族は、年長世代が年少世代に自分たちの夢を追い求めるよう求めるという、よくある家族の慣習が、最終的には家族の富の保全努力を台無しにしてしまうことを理解している。彼らは、私と同様に、他人の夢を代わりに夢見ることは誰にもできないということを知っているのだ。私の見解では、長期的な家族の富の保全を成功させる秘訣は

の秘訣は、年長者が若者に「君は何を情熱的に追求しているのか？　そして、私はそれにどう投資すればよいのか？」と問いかけることにある。若年世代の個々のメンバーが何に情熱を注いでいるかを発見することで、年長者も若者も共に、若年世代が歩むべき人生の旅路を最も充実させる仕事とは何かを認識し始める。そのような仕事が明確になれば、家族は、各個人が自らの天職となる仕事を習得するプロセスに投資することができる。 私が「天職を知るための副業の発見」と呼ぶこのプロセスを通じて、家族内における仕事の意義が明確になっていく。

ある家族がこの戦略を追求すると仮定した場合、アメリカ社会には、その信念体系から直ちに払拭しなければならない文化的神話が一つある。それは、「賃金を得るための仕事だけが称賛に値する仕事である」という考え方である。19世紀後半まで、社会における仕事のほとんどは農業か職人業のいずれかであった。農業社会において、家族は主に自らの生計を立てるために働いていた。もし余剰が生じた場合、それは外部からの防衛と内部の秩序を維持するために、社会の軍事・司法部門への財政的貢献として政府に納められていた。 産業革命以前の社会における職人部門では、職人は自らの製品を製造し、販売または物々交換を行い、利益を直接手元に留めていた。男女が賃金制で他人のために働くことはめったになかった。産業社会の到来に伴い、人々が組織化された枠組みの中で働く必要性が生じた。この必要性が、今日私たちが「有意義な労働の唯一の形態」と定義する賃金労働制度へとつながった。 したがって、つい最近までは、個人の仕事は得た賃金によって定義されるのではなく、個人の自尊心や、家族や社会における自身の役割に対する理解への貢献度によって定義されていた。仕事とは、個人がコミュニティの中で自分自身をどのように定義するか、そしてコミュニティがそれをいかに公平に評価するかという手段であった。

21世紀初頭のアメリカの家族との関わりを通じて、私は、個人の人生における仕事の成功をどのように評価すべきかについて、歴史的な理解を持っている家族が極めて少ないことにますます気づかされる。ミハイ・チクセントミハイ[2]が提唱する「フロー状態」という現代的な視点や、アリストテレスが『ニコマコス倫理学』で論じた古代の視点における幸福の達成といった、この主題に関する見解を読んだことのある家族は、ごくわずかである。 家族が、仕事という問題の重要性を現代的な視点から捉えるにせよ、古代的な視点から捉えるにせよ、今日の仕事に関する核心的な問いは、古来から問われてきたのと同じ深遠な問いであると結論づけるだろうと私は信じている。「その個人は

は、自分に求められている仕事に取り組んでいるのか？」、そして、もしそうであるならば、「その仕事を、それを個人的に極めることを目指して追求しているのか？」。場合によっては、個人が自分に求められている仕事を探求する過程で、多額の賃金や、さらには莫大な経済的富が生まれることもあるだろう。しかし、利用可能な仕事の選択肢が膨大であり、また一人ひとりが唯一無二の存在であることを考えれば、そうならない場合の方がはるかに多い。 真の富、すなわち人的資本と知的資本を守ろうとする家族にとって、各個人の仕事の選択から家族が求める結果は、健全で生涯にわたり学び続ける人々である。そのような家族構成員がいて初めて、家族は存続を望めるのだ。私は、個人の仕事の価値を判断する上で最も重要な要素は、その仕事が「健全で生涯にわたり学び続ける人々」を育むという基準を満たす限り、あらゆる仕事が家族の成功にとって等しく価値があるということを理解することだと信じている。 もちろん、家族システムは、その存続に必要な金融資本を生み出さなければならない。金融資本を生み出す仕事を追求する家族構成員は極めて重要ではあるが、ジョージ・オーウェルの言葉を借りれば、彼らが「他者よりも平等」というわけではない。彼らは単に、まず自己を探求し、そして自己を知るという過程を経て、自分たちが召されている仕事を追求している個人に過ぎない。

家族内において、賃金を得るための労働こそが有用な労働の唯一の尺度であるという神話が払拭されれば、家族は、個々の家族構成員に「働くこと」を教えるプロセスの構築へと順調に進むことができる。 この考察の冒頭で述べたように、働くことを学ぶとは、個人としての尊厳を確立することを目的とした規律を身につけるプロセスである。私の見解では、その仕事が具体的に何であるかは重要ではない。働くことを学ぶことこそが、個人が大人へと成長し、最終的には個人の幸福を達成するための旅路において、決定的な要素なのである。

では、私たちはどのようにして働くことを学ぶのでしょうか。第一に、師匠のもとで徒弟として修業します。第二に、熟練工としての仕事を学びます。第三に、その仕事を個人的に極め、自分たちが召されている人生の旅路を全うできるようにします。

今日、個人が見習いの役割を回避することを許され、しばしばそうするよう促されることがあまりにも頻繁に見られます。私の経験では、この傾向は特権階級、とりわけ第一世代が存命であり、非常に多額の金融資本を築き上げた家庭で最も顕著です。こうした家庭では、年長世代が若い世代のメンバーを

組織の上級職に就かせること、あるいは単に家族経営の組織内で昇進させることの方が、より容易で寛大に見えることが多い。しかし、こうした「寛大さ」の行為は、実際には仕事を通じた自己発見のプロセスを阻害する慣行である。さらに悪いことに、割り当てられた仕事がその個人の天職と合致しない場合、その仕事に対する熱意の欠如は、しばしば怒りに満ち、自尊心を失った、非生産的で無価値な人生へとつながってしまう。 最悪の場合、子供や孫が個人的な不満を抱え、送金に依存する「信託基金生活者」となってしまうことさえある。こうした成長の妨げとなる障害は避けなければならず、家族は、各人が召命された分野の規律を学ぶための基本的なステップとして、見習い期間を避けることなく積極的に取り組むよう、家族構成員を励まさなければならない。

なぜ徒弟修行はそれほど重要なのか、そして徒弟として私たちはどのような過程を経るのか。師匠のもとで徒弟となる際、私たちは師匠にこう言う。「私を教えてください。その見返りとして、あなたから学ぶために、あなたが求める仕事を果たすことを約束します」。他者を敬い、服従し、自己を委ねるというこの根本的な行為こそが、あらゆる学習過程の儀式の始まりである。 個人が過度に誇り高ぶったり、さらに悪いことに他者の誤った見解によって、そのような関係に入る自由を永遠に与えられないということは、いかなる主題を学ぶための「学び方」という規律を習得する可能性を自ら閉ざすことに他なりません。 あらゆる学習の状況は、労働のプロセスである。私たちに求められている仕事をこなすことで、最も多くを学ぶことができる。なぜだろうか？ それは、学ぶべきことを学びながら、真に自分らしくあるべき姿へと成長していく喜びが、その教訓を学ぶためにやらなければならないことの重荷を和らげてくれるからである。

見習いとは、学びのプロセスへの献身である。熟練工として途中から始めるのではなく、見習いとして最初から始めれば、私たちが召されている特定の仕事を学ぶ全プロセスを体験することができる。最終的にその仕事を習得したとき、私たちの自尊心は高まり、発見力や洞察力も同様に高まるだろう。 人生の各段階が、その段階に必要なスキルを学ぶ新たな機会をもたらしてくれるため、私たちはこのプロセスを繰り返し活用することができ、幸福を追求する個々の使命を達成することができるのです。

師匠に弟子入りして働き方を学ぶということは、働くことを学ぶというプロセスを通じて（特定の形態の仕事を行うことではなく、とりわけ、自分が天職と感じていない仕事に対して賃金を得るために働くことではなく）、私たちが自分とは何者であるかを発見し、ソクラテスが言ったように「己を知る」という最も重要な義務を追求するのだとい

うことを理解することである。

人間にとって、仕事は単なる労働ではない。それは人間の規律と尊厳の本質であり、私たちという種を際立たせる好奇心の表れである。個々の家族構成員の趣味としての情熱に合致し、それがその個人の職業活動へと導かれるような仕事は、時を経て、より強固な家族全体を築き上げるだろう。 それは、より健全で、生涯にわたり学び続ける個人を生み出すだろう。そのような家族は、人的・知的・経済的資本が増大し、「シャツの袖からシャツの袖へ」という諺が示すようなリスクが減少していくことに気づくだろう。このようにして、仕事という規律は、成功する家族の基盤を構成する極めて重要な要素となるのである。

Copyright ©1999 by James E. Hughes, Jr.

---

[1] 本稿における「幸福」とは、アリストテレス的な意味での幸福を指す。すなわち、各個人の人生の目的は、勇気、正義、節制という美徳に感化され、それらをうまく調和させながら生きること、家族や地域社会への参加、美学への理解、そして他者に害を与えないことを通じて、幸福を成功裏に追求することにある。 参照：アリストテレス『*ニコマコス倫理学*』（J.A.K.トムソン訳、ヒュー・トレデニック改訂、ロンドン：ペンギン・ブックス、1953年）。[2] ミハイ・チクセントミハイ『*フロー――最適な体験の心理学*』（ニューヨーク：ハーパー・コリンズ、1990年）。